

寶乘院愛染堂蔵

熊谷市指定民俗文化財
木造愛染明王坐像

調査報告書

(像・台座・光背)

平成28年 8月31日

本書は熊谷市下川上地区（星宮）にある寶乘院愛染堂の保存修理完成後、隣接する自治会館に遷座されていた愛染明王像を環坐するため、依頼を受け平成28年7月から本件に関った吉備文化財修復所が移動安置の指導、実作業を行った際、像、台座、光背に関して簡易調査を行った。その調査報告書である。



吉備文化財修復所
さいたま市北区植竹町1丁目587番地5
Tel・Fax 048-667-6671

修理報告書は著作権法に定められた著作物にあたります。
本報告書に使用しているすべての文章・写真・図を、当修復所の許可無く複写・転載することを禁じます。

寶乗院愛染堂蔵 木造愛染明王坐像 調査報告書

I 名称・員数 木造愛染明王坐像 1 軀 (台座、光背含む)
(指定の有無) (昭和63年11月3日 熊谷市指定民俗文化財)

II 所在地 埼玉県 熊谷市 下川上33

III 所有者 寶乗院 代表役員 宮崎 憲田 (実相院兼務住職)

IV 調査者 吉備文化財修復所 代表 牧野 隆夫、佐藤 健彦、西巻 彩子
埼玉県 さいたま市 北区 植竹町1丁目587番地5
協力：立正大学教授 秋田 貴廣

V 調査場所 現地 自治会館及び愛染堂

VI 調査月日 平成28年8月26日～27日

VII 像の現状

*本書で表記する右、左は、すべて像の右手側を右、左手側を左としている。

1. 法量 (cm)

全体	最大高		246.0	最大幅 (光背幅)	195.0	最大奥 (台座幅)	147.5
本体	最大高 (頂一地付)		154.0	最大幅(右第 2手)	119.0	最大奥(手 先一背面)	84.5
	髮際高		116.0	面幅	23.0	面奥	38.5
	頭頂一顎		36.0	耳張	31.0	胸奥	25.5
	髮際一顎		29.0	本手肘張	88.0	腹奥	38.0
	重量 83kg	膝高	右	21.0			
左			22.0				
台座	最大高		110	最大幅	173.5	最大奥	147.5
	蓮華	厚	35.5	幅	134.5	奥	128.5
	敷茄子(宝瓶)	厚	19.8	径(円形部)	95.0		
	同上受座	厚	5.0	径	103.0		
	蕊	厚	5.5	径	124.5		
	反花	厚	18.0	最大径	132.5		
	上框	厚	15.0	幅	152.3	奥	130.0
	框	厚	15.0 最大厚 16.5	幅	173.5	奥	147.5
	光背軸穴	高	7.0	幅	37.5	奥	3.2
光背	高(柄含まず)		235.0	最大幅	195.0	最大厚	3.5
	柄	高	6.0	幅	37.0	厚	2.8

2. 形状

本体	<ul style="list-style-type: none"> 一面六臂の坐像。頭部は、頭頂に五鈷杵を載せ、頭部前面には獅子頭(上顎より上部のみ)を、頭部後半は地髪を花形に表す。左右に大きく表した焰髪は毛筋目を彫出するが地髪にはない。天冠台(もしくは獅子頭固定紐か)は焰髪より後方のみ紐2条で表す。笄、天冠帯は左右耳の上で天冠台に付ける。額に一眼をあらわし三眼とする。開口し上下ともに6歯と舌を表す。耳朵環状。三道。 条帛、裙を着け、胸飾を付ける。 腕(本手=第1手、上脇手=第2手、下脇手=第3手と呼称)はそれぞれ臂釧、腕釧をつ
----	---

	<p>ける。右第1手は体側で屈臂し、右胸前で手首を転じ、掌を外に5指を握り五鈷杵を執る。右第2手は体側で肩よりやや下で屈臂し、右耳脇に挙げ5指を握り未開蓮を執る。右第3手は体側やや後方で屈臂し右側で5指を握り、矢を2本執る。左第1手は体側で屈臂し腹前で5指を握り五鈷鈴を執る。左第2手は肩よりやや下で屈臂し、左耳脇に挙げ5指を握る。左第3手は体側で屈臂し左側で5指を握り、弓を執る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結跏趺坐し台座上に坐す。
台座	<ul style="list-style-type: none"> ・蓮華、敷茄子（宝瓶）、同受座、蕊、反花、上框、下框からなる七重の（宝瓶）蓮華坐。 ・敷茄子（宝瓶）と同受座を除く各段は背面省略。 ・蓮弁は周囲に10弁分を刻むが、背面を省略しているため、1段目7弁（背面3枚は省略）、2段目8枚（うち背面2枚は半分のみ他省略）を表し、3段目は7弁（1段目と同）の魚鱗葺き。 ・敷茄子は宝瓶の全面に布を纏わせ左右で花形に結んだ意匠とする。 ・蕊は筋目を表さない。 ・反花は蓮華同様、周囲に10弁分を刻むが、背面を省略し7弁とし、間に副弁を表す。 ・上框は円形で背面（周囲10等分した3つ分）を平らに省略し、5箇所に入り隅、正面側三面の見付面に文様を表す。 ・下框は回り脚をつけた円形で上框の背面と連続して背面省略し、5ヶ所に入り隅、それぞれ飾り金具をつける。
光背	<ul style="list-style-type: none"> ・楕円形に近い舟形光背。二重円相は外から紐3条、内区1条とし、周辺部に小さく火焰を配すがその外に地彫りはなし。 ・頭光内に八葉蓮華（8弁のみ副弁なし）を表す。 ・身光部は中央を円形に抜く。 ・周縁部は縁取りし、わずかに前方にせり出し、光脚は左右に大きく迦葉を表す。

3. 品質・構造

本体	表層	<ul style="list-style-type: none"> ・肌色の下地上に肉身部は朱（？）、衣部分及び腕臂釧は漆箔。 ・部分的に当初のものと思われる布貼りが見える（左足第1指先）。
	木部	<ul style="list-style-type: none"> ・木造。内削りあり。彫眼。構造の詳細は不明。頭頂五鈷杵、左右焰髪、獅子の耳は別材矧寄せ。左右両腕6臂は肩、肘、手首で矧ぎつける。両脚部は横一材か。左右腰に三角材。 ・簪、天冠帯、胸飾は金銅製。 ・像底は全て板張り。幅28cm程の板材を前後方向に3枚はり、左右不足分に板材を矧ぐ（計5枚）。板の厚みは1cm程度で、鉄釘で固定、中央材は前後2材。
台座	表層	<ul style="list-style-type: none"> ・下地は全て肌色下地。上框以上は、朱漆、漆箔。蓮華天板は朱漆塗り。下框は黒漆塗り。下框と回り脚の隅金具は金銅製。
	木部	<ul style="list-style-type: none"> ・寄木造り。内部に構造材はなく中空。各段とも基本構造は6材を矧ぎ寄せ、内部角に三角形の補強材を入れる。 ・蓮華：上下2段に材を積み、天板の縁を支える構造材を蓮肉内部に打付け、さらに天板中央を前後に渡した棧を2本で受ける。天板は左右を長手として薄板6材をそれぞれ固定せず落とし込む。 ・敷茄子受座：上面に宝珠7個を別材で矧ぎ寄せる。 ・上框：一部反花の載る上面のみ天板を貼り、縁回りに小材を矧ぐ。 ・下框：上框を載せた周縁部に、飾り縁として面取りした小材を矧ぎ寄せる。
光背	表層	<ul style="list-style-type: none"> ・布貼り。肌色下地。朱塗り。 ・二重円相周縁と八葉蓮華、火焰、周縁部縁周りと光脚は漆箔。
	木部	<ul style="list-style-type: none"> ・寄木造り。周縁部内に別制作した二重円相部を嵌め込む構造をとる。 ・二重円相部：縦方向に数材を矧ぎ寄せ、身光部の中央を円形に抜き、その上部に横棧を打付け補強としている。 ・周縁部：縦方向に板材を数材矧ぎ寄せ縁回りに小材を矧ぎ付け周縁のせり出しとする。二重円相の上部位置で横棧を打ち補強材とし、光脚部位置で横棧を打ち二重円相との一体化を図っている。上棧の両端左右のやや下方に環状頭の釘が打たれており、堂内梁の同様釘と金具（両端に鈎のついた金属棒か）で連結し、自立補助としていたものと考えられる。

4. 損傷状況

本体	表層	・表面の汚れ。土埃。表面塗膜層の亀裂。部分的な浮き上がり（特に鉄釘の上）、剥落。持物は五鈷杵下部の剥落が著しい。
	木部	・鉄釘の腐食によるふくらみ。 ・一部矧目の遊離、特に底板の裳先部分、裳先右の付根、腕臂釧の飾り紐。
台座	表層	・表面の汚れ。土埃。表面塗膜層の亀裂。部分的な浮き上がり、剥落。 ・飾り金具の腐食。
	木部	・部材の遊離、脱落（蓮華天板、一部補強材）。 ・鉄釘鏽の錆。
光背	表層	・表面の汚れ。土埃。表面塗膜層の亀裂。部分的な浮き上がり、剥落（特に身光部中央の上下）。
	木部	・全体に矧目が緩み部材の遊離が見られ、特に周縁部上部の小矧材が崩壊寸前である。

5. 後補箇所

本体	・表面の彩色と漆箔。 ・後頭部材と背板、両脚部上面右から裳先右半ば、底板、持物全て。天冠帯垂下部と笄が補作。
台座	・全て像本体よりも後世の作。 ・今回細谷工務店による応急処置：内部の補強材（新材）、一部遊離部の接着と既存補強材の固定し直し。竹釘を用い、接着はすべて酢酸ビニル樹脂系エマルジョン形接着剤（木工用ボンド）による。
光背	・全て像本体よりも後世の作。 ・背面の応急的な部材固定、ガムテープ、薄板材等は今回堀口工務店による。 ・薄板固定の一部（右上部、細木ネジ）は吉備文化財修復所による。

6. 銘文

- ・はっきりとした意味のあるものは見つからなかったが、台座内部に正面を表す符丁と見られる墨書きがあった。

VIII 所見

1. 履歴

年代	内容	根拠
大同元年（806）	陸奥国、筑紫国と三ヶ所に造られたうちの1体とされる。	伝承
	漂着伝説。像は星川（現新星川）を流れて来た。	『熊谷染織の歴史』中の「下川上の愛染さま 資料7 下上川安全同縁起」
享保十一年（1726）	現愛染堂建立。 この頃像の修理も行われたか。	現状の像の修理痕跡、後補の台座光背の制作様式からは、この頃の特徴が認められる。
近世～近代		堂内に多数の絵馬が残り信仰を集めていたことが分かる。

2. 制作年代

- ・像の制作年代に関する明確な文献資料はなく、像自体に墨書きなども確認されていない。しかしながら、愛染明王像としては希有な大きさであり、外観、大きさ、修理痕跡等から制作は江戸初期を遡るものと見られ、中世の作である可能性も否定できない。

IX 参考文献・参考作品等

- ・五島美術館、覚園寺、西大寺所蔵像など。